

## 江戸女流漢詩における梅の諸相

Do Thi Mai

### はじめに

梅は奈良時代に中国から日本に伝来した植物である。日本の詩歌の中では『懐風藻』をはじめ、『万葉集』でも梅が多く詠まれている。梅は「四君子」である蘭、竹、菊、梅の四種の中のひとつである。梅の花は古人によって純粹さと無邪気さの象徴とも考えられてきた。梅の花の香りは清らかな心を持った穏やかで高潔な君子に比喩される。さらに、寒中で多くの花が咲かない時期であるが、元気に咲き誇る梅花は忍耐の象徴とされてきた。梅の花は特に目立たないが、内面の美しさと逆境に直面した際の回復力の象徴と見られる。

江戸時代には多くの漢詩人が輩出し、漢詩の隆盛期と言える。日本に漢詩が入ってきた時代から江戸時代より前にかけて、漢詩の作者はほとんど男性であった。しかし、江戸時代には女性詩人が登場しており、江戸漢詩に新しい風潮をもたらした。自然の美しさに心をゆり動かされやすい女性詩人の漢詩には、植物や花などがよく詠まれている。そのような植物の世界の中にある梅は女性詩人にどのように詠まれていたのだろうか。日本人の生活では梅がいくつかの空間で登場する。野に生きる梅、人の庭に植えられた梅、部屋の中での梅の盆栽と花瓶にさした梅などがある。本稿では野と庭という空間を「外」とするのに対して部屋という空間を「内」として梅の登場空間を分け、その上で、多くの表徴を持っている梅という植物が江戸期女性詩人の漢詩でどのように描写されたのかを論じる。さらに、梅を詠む詩を通じて江戸漢詩の女性的叙情と叙景の表出について考察する。

### 1. 「外」における梅

梅は日本に伝来して以来、全国の多くの所に植えられてきた。特に江戸時代はそれ以前の時代より園芸が発達したため、梅の栽培も広がっていた。その結果、梅は江戸時代の人にとってより身近な植物になり、人の目に頻繁にとまる。特に、微細な心をもつ詩人は美しい梅に心を揺さぶられやすい。

江馬細香（1787-1861）は江戸時代の三大女性詩人の一人として知られており、豊富な

漢詩の詩題と詩材の中で梅もしばしば登場する。1818年に「春日即時」<sup>しゅんじつそくじ</sup>という一首を詠んだ。

東風剪剪入簾帷 東風 剪剪として 簾帷に入る  
 試訪梅花下砌遲 試みに梅花を訪わんとして 砌に下ること遅し  
 一朵幽香斜日裏 一朵 幽香 斜日の裏  
 先農已有凍蜂知 農に先んじて 已に凍蜂の知る有り<sup>1</sup>

少し冷たい春の風はとばりを通し、部屋の中に入ってくる。試しに梅の花を見に行こうとし、ゆっくりと庭に降りた。夕日の下で奥ゆかしく漂ってくる香りに、凍えていた蜂が自分より先に気づいた。

「即時」という詩題であるため、作者の眼前にある物事が詠まれている。時間と空間の紹介から転じて、自然の世界における植物と動物を忠実に描写しており、詩人の行為も面白く詠じられている。また、梅の花を季節の移り変わりの象徴として読むこともできる。東から春風が吹いてきた、と描かれる季節の到来は、詩人に梅の花が咲くのを思い起こさせる。「梅」のテーマのもとでの「東風」の表現は中国宋代の詩人蘇軾（1037-1101）の「梅花二首」の「其一」を連想させる。

春來幽谷水潺潺 春來 幽谷 水 潺潺たり  
 的皦梅花草棘間 的皦たる梅花 草棘の間  
 一夜東風吹石裂 一夜 東風 石を吹いて裂く  
 半隨飛雪度関山 半ば飛雪に随って関山を度る<sup>2</sup>

「春日即時」における梅は細香の身近な庭にある梅であろう。また、細香は故郷を離れて、旅をした折、旅先の梅についても詠んでいた。以下は1827年に伏水（伏見）へ梅見に行った時の詩である。

京城幾度趁花開 京城 幾度か 花の開くを趁う  
 清賞參差未及梅 清賞 參差 未だ 梅に及ばず  
 有閨今春春事晚 閨有り 今春 春事 晩く  
 恰看溪畔雪千堆 恰も看る溪畔の 雪 千堆<sup>3</sup>

この詩では細香ははじめに自分の梅見の体験を紹介し、その後、気候と目の前の景色を

表現した。冬から春へ季節の移り変わる時節の到来は梅花が咲くことを知らせる兆しであろう。それで、細香の詩では、今年は春がまだ来ていないため、梅がまだ咲いていないことを表した。梅が咲くことは、これからの暖かい春の日々の始まりを意味し、人々に喜びを与えるのだろう。しかし、細香が直面していた事実は「梅がきれいに咲いていない、春がまだ遠いととも雪が多くたまっている寒さ」であり、そこからは悔しい気持ちが読み取れる。

細香と同じ大垣出身の梁川紅蘭（1804-1879）も江戸時代の三大女性詩人の一人として知られている。紅蘭も梅という素材に愛着しているようである。1827年の梅の花を詠む二首に以下の一首がある。

「梅花寒雀図」	「梅花寒雀の図」
啁啾百千相集喧	啁啾 百千 相集りて 喧し
蹋枝啄蕊弄春暄	枝を踏み 蕊をついで 春暄を弄す
不知粉蝶眠何處	知らず 粉蝶 何れの處に眠るかを
剛被嘉賓占上番	剛に嘉賓に上番を占めらる <sup>4</sup>

多くのすずめが集まり、しきりにさえずっている。枝を踏み、蕊をついでおり、春の暖かさを楽しんでいる。蝶はどこに眠っているのか。今は雀というお客様に春の一番の花を占められている。

春の景色における自然を豊かに詠んでいる詩である。雀、蝶、花はいずれも春の代表的な事物であるが、雀、蝶の行為の描写を通じて美しい梅の花の魅力を浮き彫りにしている。紅蘭は、愛着のある景物が描かれた絵画を見たため、その絵画への感動から、詩作へと至った。視覚的な映像を与える絵画を鑑賞したことによって言葉で表現される詩を賦したのは紅蘭の想像力と表現力の非凡さを示しているのだろう。

紅蘭は、梅をとりわけ好んだため、漢詩のみならず絵も描いた。紅蘭の「月梅図」という絵には漢詩も題されていた。

怪底半窓疏影生	怪底む 半窓に疏影の生ずるを
残雲忽破夜清明	残雲 忽ち破れて 夜 清明たり
餘香襲枕眠不得	余香 枕を襲い 眠るを得ず
起擺柴門蹋月行	起きて柴門を擺き 月を踏みて行く <sup>5</sup>

小さい窓に梅の枝のまばらなかげが映るのを不思議に思ったが、それは消えゆく雲の急

な綻びによって月の清明な夜となったからだった。梅花の香は枕元まで飛んできたため、眠ることができなくなった。それでしばを編んでつくった門を開け、月下に歩いていった。

自然を写生した詩と言えよう。紅蘭は梅に関する自分の体験と感想を忠実に詠じた。梅を詠む詩では「疏影」と「踏月行」という表現は中国の詩歌にも見られるが、「余香が枕を襲」うというのは紅蘭に特有な表現で新たな発見と言えよう。梅の魅惑的な香に眼を覚まされ、その香が枕辺にまでただよい、寝ることができず、起きあがり簡素な門扉を開き月光に照らされた地面を踏みつつ、散策に出る。特に、女性のセンチメンタルな感情が感じられる。

紅蘭は夫星巖とともに多くの場所へ旅をして放浪の生活をしていた。その中で、月ヶ瀬や伏見など当時の梅の名所で梅見を体験できた。また、1844年に江戸に在った時、星巖の弟子である懐之と彦之<sup>1</sup>を伴って舟に乗って梅見に出かけた。この折に「看梅八首」という梅についての詩を八首賦した。

五里十里香世界 五里 十里 香の世界  
 千家萬家雪楼台 千家 ばんか 萬家 雪の楼台  
 東君税駕何其早 東君 とうくん 税駕すること 何ぞ其れ早き  
 臘月初頭花盡開 臘月 ろうげつ の初頭に 花尽く開く<sup>6</sup>

遠く広がる空間に梅の香りが漂い、家々に散っている花びらは雪のようである。春の神が何と早く着いたのか。陰暦の12月初頭の時期にもかかわらず梅花がもう開き尽くした。

紅蘭は自分の梅見の体験について詠んでいた。起句と承句では梅花の香と花びらが漂っている空間を描写した。転句では気候の叙述へ移った。今年は春が早く来たため、梅の花はすでに満開になった。この詩における気候の現状は細香が1827年に伏見で梅見について作った詩で描いたものと反対である。寒い時期をくぐり抜け、陽気に誘われて咲く花の姿は、可憐で、心を慰める。賑やかな梅見の光景を歌っている詩で楽しく明るく春を謳歌する紅蘭の姿が想像できる。

紅蘭は花見で野にある梅だけでなく、自分の庭にある梅にも視線を注ぎ、「庭梅」という一首を賦した。

庭梅口噤欲開難 庭梅 口を噤み 開かんと欲するも難し  
 淦淦陰雲十日寒 淦々 いんうん たる陰雲 十日寒し

<sup>1</sup> 小野湖山(1814-1910)と鱸松塘(1824-1898)を示す。幕末から明治時代の漢詩人。

今晚風頭較晴暖 今晚の風頭 較 晴暖たり  
 一枝笑影捲簾看 一枝の笑影 簾を捲きて看る<sup>7</sup>

起句と承句は梅と気候の状態が紹介された。梅は口をしっかりと嚙んでどうにも開こうとしない。冬の暗い雲で十日は寒いといった調子。この寒い気候で梅の花が咲くのは難しいだろうと、紅蘭は判断する。転句では今朝の風は晴れやかに少し暖かくなってきたという変化が起こり、暖かい春の朝となったのであろう。簾を捲って一枝に咲いた梅の花の姿を看る、という詩人の行動が結句に表わされた。

この詩は梅について詠んでいたが、詩人の日々の小さな楽しみも読み取れる。また、このような「庭梅」のテーマで紅蘭は「庭中梅開一枝」という詩をも詠じていた。

照苔映水太嬋娟 苔を照らし 水に映じて 太だ 嬋娟たり  
 半帯残陽半帯煙 半ば残陽を帯び 半ば煙を帯ぶ  
 竹外一枝斜更好 竹外の一 枝 斜めにして更に好し  
 令人忽漫憶坡仙 人をして 忽漫に坡仙を憶はしむ<sup>8</sup>

梅花は緑の苔に映え、池水に映え非常に美しい。その半分は夕陽に照らされ、半分は煙霞につつまれている。竹林から斜めに伸びる梅の一枝は殊に美しく、誰もが思わず蘇東坡翁を思い出す。「坡仙」は中国北宋の詩人である蘇軾（1036-1101）を敬慕して言う呼称である。江戸時代後期には宋詩が人気であり、蘇軾の詩は多くの詩人に読まれ、影響を与えた。紅蘭が梅を眺めた時、蘇軾を思い出した理由は蘇軾も梅に愛着した詩人で梅について多くの詩を残していたからと言えよう。その中、蘇軾の「和秦太虚梅花」という一首の中で「江頭千樹春欲闇（江頭の千樹 春 暗からんと欲す）、竹外一枝斜更好（竹外の一 枝 斜めにして更に好し）。」という句があり、紅蘭はこの句を自分の詩に取り入れた。目の前のものを観察することで古人の詩句を連想するのは詩人の感情の普遍的特徴であるが、古人の名をあげながら、自分の思いを率直に表すには紅蘭の詩の誠実さがみられるのであろう。

この時、病床で紅蘭は庭の梅を眺めていた。元気な梅の枝と病気の紅蘭という対比が見られる。寒さの中に力強い梅を見ると、病気を患っている詩人は慰められるのではないだろうか。

さらに、紅蘭には「看梅 梅を看る」という梅に関わる一般的な行動だけでなく、「栽梅 梅を栽える」という梅との特殊な体験もあった。

新栽正值一陽回 新たに栽するに 正に値ふ 一陽の回るに  
 看見南枝臨水開 看見す 南枝の水に臨みて開くを  
 孤影立残深夜月 孤影 立ち残す 深夜の月  
 寒香吹徹滿庭苔 寒香 吹き徹す 満庭の苔  
 不容載酒雜賓至 容れず 載酒の雜賓の至るを  
 只待読騷名士来 只だ待つ 読騷の名士の来るを  
 縦是貧居也堪慰 縦ひ是れ貧居なるも也た慰むに堪ふ  
 幸然同社足奇才 幸然 同社 奇才足る<sup>9</sup>

今年の初めに植えられたばかりの一本の梅の木である。南側の枝が小川の上に伸びているのが見える。夜更けの月の下に、その孤独な影が漂う。庭を埋め尽くす苔の間から、その冷たい香りが漂ってくる。酒をもってさまざまな俗客たちがやってくるのは拒否し、ただ学問のある名士たちがやってくるのを待つ。私は貧しく暮らしているが、この木は慰めを与えてくれる。そして幸いなことに、私たちの詩社には多くの素晴らしい才能が含まれている。

この詩の前半は梅の枝と香の描写で紅蘭の「月梅図」に書き付けられた詩を連想させるが、第五句と第六句では梅を人に喩える擬人法が利用され、梅の高潔さが強調される。「雑賓」と「名士」であり、また「載酒」と「読騷」の対立で前者が「俗」である一方、後者が「雅」のことと見られる。紅蘭は梅について描いたが、梅の描写を通じて、世間に対する自分の態度を表したと言えよう。第七句と第八句では詩人の生活の現実が詠まれ、物質的豊かさと精神的豊かさの対立も見られる。「叙景」と「抒情」をうまく取り合わせた一首であろう。

庭に新しく植えた梅の情報が紅蘭に提供されていたが、紅蘭はこの梅の木を自分の比喩として用いたと見られる。この詩は 1861 年に詠まれ、紅蘭の夫星巖が既に亡くなり、紅蘭は安政の大獄で星巖の身代わりとして捕えられ、また投獄された。孤独で貧乏な生活を過ごす女性であるが、梅のように高潔に生き続けた。また、梅の花が咲く頃は一年の始まりの時期であるため、何か新しい事を始める新鮮感を与える表徴として用いられ、紅蘭も梅の木と才能のある学者とに励まされたり、癒されたりして、新たな学問を求めるのではないだろうか。

紅蘭のこの梅を詠む詩をみると、中国の林逋（967-1028）の「山園小梅」という詩の影響が見られる。

衆芳揺落独嬋妍 衆芳 揺落して 独り嬋妍たり  
しゅうほう ようらく せんけん

占尽風情向小園 風情を 小園に 占め尽くす  
ふうじょう しょうえん  
 疎影横斜水清浅 疎影 横斜して 水 清浅  
そえい おうしゃ せんせん  
 暗香浮动月黄昏 暗香 浮动して 月 黄昏  
あんこう ふどう こうこん  
 霜禽欲下先偷眼 霜禽 下らんと欲して 先ず眼を偷み  
そうきん  
 粉蝶如知合断魂 粉蝶 如し知らば 合に魂を断つべし  
ふんちょう  
 幸有微吟可相狎 幸に微吟の相い狎るべき有り  
びぎん  
 不須檀板共金樽 須いず 檀板と金樽とを共にするを<sup>10</sup>  
だんばん きんそん

林逋は淡泊な性格であり、俗世を捨て、隠棲した中国の詩人として知られている。特に、庭に梅数百株を植え、鶴を飼い、梅を妻とし鶴を子として暮らしたという林逋に関する逸話がある。紅蘭はこの詩で林逋の「山園小梅」の中の表現を好み、活用しただけでなく、質素な生活を営みながら学問に勤しむところに、林逋との共通点を見出し、共感していたのであろう。

細香と紅蘭とともに江戸三大女性詩人と呼ばれたもう一人は原采蘋（1798-1859）である。采蘋の漢詩にも梅という詩材はしばしば取り上げられた。采蘋は 1827 年に故郷を出て、江戸に向かう途中で神辺に滞留した際、梅の咲いているのを見て、以下の詩を詠じた。

萍蹤相遇豈尋常 萍蹤 相遇は 豈に尋常ならんや  
へいさい あに じんじょう  
 賓主一堂皆異郷 賓主 一堂 皆異郷  
ひんしゅ いきょう  
 梅着寒花点白雪 梅は寒花を着け 白雪を点ず  
いぼく せいのう  
 客藏遺墨在青囊 客は遺墨を蔵して 青囊に在り  
いぼく せいのう  
 尋盟難奈山河邈 盟を尋ねんとするも 奈ともし難し 山河の邈かなるを  
いた  
 話旧還牽風樹傷 旧きを話れば還つて牽かる 風樹の傷めるに  
いた  
 此夕若非期群会 此の夕べ 若し群会を期するに非ざれば  
ぐんかい  
 愁中爭得把杯觴 愁中 争でか 杯觴を把ることを得んや<sup>11</sup>  
しゅうちゅう はいしやう

また、ほかの采蘋の詩句にも梅の花が多く出ている。

「山寒鳥道猶封雪 山寒の鳥道 猶ほ雪に封ぜられ  
ちやうどう  
 烟淡梅梢欲放春 烟淡の梅梢 春を放たんと欲す」<sup>12</sup>  
たんえん  
 「客舎明年臘梅節 客舎の明年 臘梅の節  
ろうばい  
 西窓斜月定懷君 西窓の斜月 空しく君を 懷う」<sup>13</sup>  
しゃげつ  
 「梅開窓外俱含笑 梅 窓外に開きて 俱に笑みを含み  
そうがい

人坐帷前更愴神 人 帷前いぜんに坐して 更いたに神を愴ましむ」<sup>14</sup>  
「吉備山雲欲暁光 吉備きびの山雲さんうんぎょうこう暁光ならんと欲し  
四五声高野梅香 四五 声高く 野梅やばい香る」<sup>15</sup>

しかし、このような采蘋の漢詩は梅を中心に描写することはなく、春の景色の中の一つのものとして他のこととともに詠まれていた。采蘋によって詠まれた梅は詩人が旅した際に、詩人の眼前に広がる自然の一部としての梅である。

## 2. 「内」における梅

梅は自然における植物であるが、江戸時代には自生している姿を楽しむだけでなく、愛玩される花として詩人の生活空間を構成するものの一つとなった。

細香は1817年に「閨裏盆榿盛開、偶有此作」（「閨裏けいりの盆榿ぼんばいさか盛ひらんに開く。偶々たま此この作さくあり」）という詩を作った。

花比去年多幾枝 花 去年ひに比して 多いくえだきこと幾枝ぞ  
慇懃愛護下簾帷 慇懃いんぎんに愛護あいごして 簾帷れんいを下す  
縦能清操堪寒夜 縦たと能せいそうく 清操かんやもて 寒夜たに堪たうるとも  
不遣風霜迫玉肌 風霜ふうそうをして 玉肌ぎよくきに迫らしめじ<sup>16</sup>

梅の花は去年と比べ、今年は多く咲いている。窓のたれぎぬを下ろして、大切に花を守る。花はどんなによく夜の寒さに耐えられても、玉のように美しい肌のような梅花に風と霜を近寄せない。

中国宋代の蘇軾「紅梅」三首其一に「寒心未肯随春態、（寒心 未だ肯て春態に随はず）酒暈無端上玉肌（酒暈 端無くも玉肌に上る）」とある。この「玉肌」という表現が取り上げられた。また「閨裏」は女性の寝室という意味である。梅を詠む詩であるが、女性の感情と関連づけられている。梅の花を大切にするためにとぼりを下ろすという行為は女性の柔らかい行動と言えよう。「寒夜」は冬の寒い夜であるが、一人の女性の寂しい気持ちを暗示している。「玉肌」は美人の肌という意味でもある。詩の全体は梅を大切にしたいが感じられるが、この詩を通じて、細香は自分の姿について描いたのではないだろうか。自分は梅のように清操を貫いており、寒夜に耐えられるが、外の風霜にさらされないように梅を守ろうとすることは世間の俗から自分を守ろうという喩えである。

細香には四十二歳の冬に「歳晚偶作」という一首がある。

與梅相侶送殘年 梅あいともと相侶して 殘年を送る  
 一片清香せいこう撩醉眠 一片せいこうの清香 醉眠すいみんを撩む  
 但愧鬢邊多白處 但だ愧くわいず 鬢邊びんへん 白處はくじょの多きを  
 三更酒醒獨凄然 三更さんこう 酒醒さめて 獨せいでんり凄然<sup>17</sup>

この詩では細香は自分の老い先の短い年齢について詠んでいる。孤独な残年の日々に梅を友人として過ごしている。この詩における梅は盆栽の梅か花瓶の生花か分からないが、咲いており、香を放つ梅の花が若い美人を連想させるため、老けた細香との対立を著しく読み取ることができる。また春の景色を華麗に表していることは、細香自身に対して自分の孤独を突きつけるものでもあろう。

また、「梅」、「酒」とともに自分の生活を詠むテーマで細香には以下の詩篇もあった。

団欒だんらん拳酒對瓶梅 酒を挙げて 瓶梅に対す  
 甲子又逢新歲開 甲子又 新歲こうしまたの開くに逢う  
 最後屠蘇無献所 最後とそけんの屠蘇 献けんずる所無し  
 偏思膝下去年杯 偏しっかに思う 膝下去年の杯<sup>18</sup>

詩に詠まれている花瓶にさした梅は細香と一緒に空間と時間を共有し、身近な存在である。また、詩では瓶梅と老けた自己を対比する意図がある。この梅は根がなく、花瓶に入れた水に頼り、過ごしているため、長く生きることはなく、いつか枯れてしまう。細香は老境にさしかかり、梅のように身体が衰えてしまうと感じているのであろう。

同じように花瓶に生けた梅という詩材が、紅蘭が 1841 年の大晦日に賦した。「辛丑除夕」という詩で自分の生活の実態と感想について詠むなかにも登場する。詩には「瓶梅びんばい咲相侍わら（瓶梅 咲いて 相侍するは）、真乃千金しんすなわせんきん価あたい。」という句がある。そばにある花瓶にさした梅が咲いているのは本当に高価なことであるといい、詩人の日々の楽しみが忠実に詠まれた詩であった。

### 3. それ以外の空間—抽象的な梅

ここまで検討してきた「外」と「内」という空間における梅は、いずれも詩人の眼前に実在するものであった。しかし、その他の江戸女性漢詩人の漢詩のなかには、現実の梅を詠んだわけではないものもある。詩では梅を賦すが、抽象的なことを伝える目的もある。

かめいしょうきん

亀井小琴（1798-1857）は江戸時代の女性詩人である。父親の弟子、後の夫となる三苦源吾(雷首)は十六歳になった小琴に以下の詩を送った。

二八誰家女 にはち 二八 むすめ 誰が家の女  
 嬋娟真可憐 せんえん 嬋娟 あわれ 真に憐むべき  
 君無王上点 君に 王上点なし  
 我為出頭天 しゅつとうてん 我れ出頭天たらん<sup>19</sup>

小琴はこの詩に答えて、次の一首を詠んだ。

扶桑第一梅 ふそう 扶桑第一の梅  
 今夜為君開 今夜 君が為に開く  
 欲識花真意 し 花の真意を識らんと欲せば  
 三更踏月来 さんこう 三更 月を踏みて来れ<sup>20</sup>

これは恋詩であるが、その中で梅が中心に詠じられている。恋詩において梅を詠んだ前例が少ないため、小琴の新たな発想であるといえよう。小琴はこの梅の花を自分に例えたとも言えよう。自分の庭に本当に咲いている梅があるか、または小琴の想像と隠喩であるか、判断しにくい詩篇であるが、女性の可憐な感情を感じさせる。

たちばなぎよくらん

立花玉瀾（1733?-1794）は江戸中期の女性詩人で『中山詩稿』という詩集を残した。玉瀾は江戸中期の詩人で玉瀾の詩には中国古典に取材したものが多いと評されている。その中で以下の梅に関わる詩句がある。

「送人之江南」 「人の江南に之くを送る」  
 離席歳将暮 りせき 離席 歳 将に暮れんとす  
 江南路且賒 こうなん 江南 路 且た 賒かなり  
 請君逢驛使 請う 君 えきし 驛使に逢わば  
 莫憚寄梅花 梅花を寄するに はばか 憚ること莫れ<sup>21</sup>

詩題に中国の故事を踏まえていることがわかる。三国時代に文士であった陸凱（?-504）  
りくがい  
 が長安にいる友人の范曄に江南に咲いている梅の一枝とともに「贈范曄」という詩を贈った故事である。

折花逢驛使 花を折って 驛使に逢い

寄與隴頭人 寄せ与う 隴頭の人に  
 江南無所有 江南 有る所無し  
 聊贈一枝春 聊 か贈る 一枝の春<sup>22</sup>

玉瀾の詩の内容は陸凱の詩に強く影響されたものと言えよう。「離れている友人に梅の一枝を送る」という故事を踏まえており、玉瀾は自分の詩でこの故事について詳細に描いた。第一句は離別のときの感情から展開されている。第二句は江南という空間へ視線を移した。第三句と第四句は友人に贈るという意向を表している。玉瀾の詩と陸凱のものとは比べると、内容は全く同じであり、表現に共通点もあるため、新たな感じをもたらさず、ただ習作の域にとどまっていると言えよう。

また、「江南一枝春」という故事は他の江戸期閨秀詩人の詩の中でも詠まれている。紅蘭は、夫星巖と細香などが作った白鷗社という文芸結社の会合に参加したことがあるため、細香との交流ができ、その後親交を結んでいた。細香は1845年の春、病気をした紅蘭にお見舞いとして梅一枝と手紙を送った。紅蘭は返礼として次の詩を贈った。

閑窓臥病養幽慵 閑窓 病に臥して 幽慵を養う  
 忽見寒香附一封 忽ち見る 寒香の一封に附せるを  
 花自清癯字疎澹 花は自ら 清癯にして 字は疎澹  
 想君平素好儀容 想う 君が平素の好儀容<sup>23</sup>

友人に梅一枝を贈るという行動は文人に好まれることであろう。細香が天気寒さに負わずに咲いている梅を病気の紅蘭に送ったことのうちには、紅蘭が梅のように身体的に強く元気になってほしいという意図が見られる。梅一枝は精神的な慰めを与える贈り物であろう。また、中国の故事のように親密な友情の表徴でもあろう。

紅蘭は若い頃、梅の美しさと自然における梅の姿を忠実に描写したが、五十一歳の紅蘭の「宿越智仙心水楼」（「越智仙心の水楼に宿る」）という詩の中にも梅が別の角度で詠まれていた。詩作の背景は1854年2月に紅蘭と夫星巖が伏見に梅を賞し、知り合いである越智仙心の寓居に泊まったというものである。

好是曉風殘月天 好し是れ 曉風 殘月の天  
 一條夢落落梅邊 一條 夢は落つ 落梅の辺  
 香魂片片喚不返 香魂 片片 喚べども返らず  
 三弄聲流漁笛船 三弄 声は流る 漁笛の船<sup>24</sup>

紅蘭は実際に梅を見たが、梅の描写ではなく、夢について詠んでおり、虚構性が濃い作品である。朝の風と月の丁度良い天気の日梅の花が散るところへ飛んでいくという夢をみた。梅の花の魂はひらひら飛んで行って、いくら呼んでも戻ってこない。漁夫の笛の音が三回夢の中に流れてきた。

紅蘭の梅に関する詩には「魂」、「笛」がしばしば登場している。春に咲く梅の花は甦りの表徴であるため、梅花の香は返魂香と称され、中国の詩歌にも見られる。また、紅蘭は自分の魂を暗示しているのだろうか。自分は梅の花が落ちるところに入り込んでおり、自分の魂は花びらと共に春の風によって遠く飛んで行ってしまう。「笛」の音は古代中国の「梅花落」という楽府詩の曲をかけているのであろう。

現実における梅の体験というリアリティを離れた作品である。紅蘭と細香の他の詩と違って、盛んに咲き誇っている梅の花ではなく、散り際の梅である。これはもの悲しさを感じさせるものである。これは中国と日本の抒情の性質が合わさったものであろう。寒中に生命力を発揮した梅でありながら、華やかに咲いていても、やがて訪れるであろう衰えを予感させる。また、夢を通じて紅蘭は自由な暮らしを目指すのであろう。女性を閉じ込める封建社会に暮らしていた紅蘭は解放の実現を常に考えていると言えよう。

中国古典をうまく活用しながら、女性の優雅さと春の風物の美しさをともに伝えるみごとに一首と言えよう。

## 終わりに

本稿では、江戸期女性詩人が梅とどのように向き合い、梅をどのように把握してきたのかを考察した。梅は冬の寒さの中に咲く高潔な花として認識されているものであるため、中国の詩歌に多く詠まれており、梅の香や外見の描写を通じて詩人の忠実で上品な生き方が伝えられていた。江戸期女性詩人の漢詩において梅が多くの角度から取り上げられた要因は大きく分けて二つある。一つ目は文学的な要因であり、中国文学の影響から江戸女性詩人が梅というモチーフに興味を持ち、詩に詠んだ。二つ目は社会的な要因である。江戸時代の梅見、梅栽培の流行のため、女性詩人と梅の出会い機会が多くなり、身近になった梅が詩人に愛され、詩で梅に関わる体験や現実を描写するようになった。江戸期女流漢詩人は、梅を詠むこと自体は中国詩歌の影響を受けながら、個性と感情を取り入れ、詩に新たなおもむきを添えることを実現した。

実際に体験した花見の場で梅の花盛りに感動したため、女性詩人は積極的に梅の外見、香、美しさを評価し、かつ色彩を鮮やかに描こうとする「景」主体のあり方を選択した。梅は春の景物として雪や鳥などとともに多く詠じられていた。「景」が詩に多く取り扱わ

れた理由は、当時の社会的な特徴で、梅の花見及び園芸、盆栽が人気であったということであろう。梅は日常生活のなかで詩人の眼前に現れ、身近な存在になっていた。中国の詩人の表現を活用しながら、生活実感に即した別な形での梅観が生じて来る。

一般的に野にある梅であるが、梅見は江戸時代に文人たちに人気のある行楽であった。女性詩人はこの体験について多く詠んでいた。さらに、この体験を通じて、梅の外見と香が実感できたため、梅に対してより愛着を深めたといえる。この結果、梅は詩人の好みの詩語になり、梅の花見を体験した後、しばしば漢詩に詠まれた。花見の体験以前は書籍、古典詩歌などで梅について想像するほかなかったが、目の前に梅を観ることができるようになったため、詩人のロマンチックな感覚を呼び起こしたのである。

野という空間における梅は詩人を含め、だれでも楽しめるものであるが、この空間をすこし縮小すれば、個人の庭に植えられる梅である。自宅の庭にある梅は詩人にとって野にある梅より身近な存在であろう。庭にある梅、特にこのような梅の香は詩人に面白い発見をもたらし、詩には新たな表現を生み出した。

詩に梅という植物自体を写實的に描出することから、梅から醸し出される豊富な情感を詠むことへという転回は「景」から「情」への転回であろう。中国詩歌では梅を媒介として「高潔」、「忍耐」という「情」が伝えられたが、江戸期女性詩人の漢詩ではより複数の「情」が取り入れられた。まず、女性の若いころの美しさの隠喩として用いられた。次に、孤独である詩人においては梅は友人のような存在として詠まれていた。詩人の部屋、また家の中という「中」の空間にある梅も女性詩人によってよく詠じられている。これは梅の盆栽であり、花瓶に生けてある梅である。このような盆栽と生花は女性の趣味であるが、身近な存在である梅は詩人の気持ちを打ち明ける相手になり、詩人のような友人になった。盆栽と生花の梅は詩人と一緒に日々を過ごしており、詩人を癒しながら、詩人が気持ちを打ち明ける特別な存在となったのであろう。

梅に関わる描写を通じて、「人間」と「自然」あるいは「人間としての女性」と「自然物としての梅」を対比する視線がある。具体的には、冬の寒さにも枯れない強さを持った梅に対する病気の女性という対立であり、香り高い花を咲かせる花瓶にさした梅もいつか枯れてしまうことを人がいつか衰色に直面しなければならないことの象徴としている。自然世界における梅を詠むことによって、詩人は自身の生き方と自分の現実を振り返ることができ、さらに人間世界における人間の自己像を形成する機会を与えられた。

日本の女性文学の歴史では、特に平安時代から、女性作者は漢文より和歌や仮名文に文学を表現した。小森甚作は「我国文学の中にも、取りわきて和歌和文こそ、女子には適すべきものなれ。女子はよろづ優美なるを尚びて、軽躁浮華なるは好ましからず。（中略）抑女子の文学は、男子の文学と異なり、勇壯活発なるを避け、温順優雅なるべきは、其性質自らこれを示せり。」と述べた（小森・上地 1901：序）。そうだとすれば、漢文、漢詩は女性に適していないという認識が常に持たれてきたと言えよう。しかし、江戸時代の

女流詩人は漢詩だけでなく、固くて音韻の約束事がある難しい文学ジャンルというイメージが定着していた漢文によって女性の柔らかな心情を表すことができた。梅という事例を通じて、江戸時代の女流漢詩人の漢詩が知性（中国古典への精通、音韻の約束に従うこと）と感情（自分が表したい事）の程よく調和し、また「情」と「景」のバランスが取れたものであったことがわかる。同じような梅の外見や香などという「景」で中国詩歌の詩語及び表現を継承しながら、江戸期女性漢詩人は多面的に新たな「情」を展開した。特に、女性らしく特有な「情」が見られた。

---

注（\*漢詩の引用情報については投稿規定に定める簡易情報表記によらず、注として一覧にした。また古典籍の引用は早稲田大学古典籍総合データベース<https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>及び国書データベース<https://kokusho.nijl.ac.jp/>によった。）

- <sup>1</sup> 江馬細香『湘夢遺稿』巻一、六丁裏、明治四年刊、東京藝術大学附属図書館脇本文庫蔵。
- <sup>2</sup> 小川環樹、山本和義『蘇東坡詩選』、岩波書店、一九七五年、一七三頁。
- <sup>3</sup> 江馬細香『湘夢遺稿』巻一、二十二丁裏、明治四年刊、東京藝術大学附属図書館脇本文庫蔵。
- <sup>4</sup> 張景婉『紅蘭小集』巻一、七丁裏、天保十二年刊、早稲田大学津田文庫蔵。
- <sup>5</sup> 張景婉『紅蘭小集』巻一、十丁裏、天保十二年刊、早稲田大学津田文庫蔵。
- <sup>6</sup> 梁川星巖全集刊行会『註解梁川星巖全集第四巻』、梁川星巖全集刊行会、昭和三十三年、一二六頁。
- <sup>7</sup> 張景婉『紅蘭小集』巻一、二丁裏、天保十二年刊、早稲田大学津田文庫蔵。
- <sup>8</sup> 張景婉『紅蘭小集』巻一、四丁裏、天保十二年刊、早稲田大学津田文庫蔵。
- <sup>9</sup> 梁川星巖全集刊行会『註解梁川星巖全集第四巻』、梁川星巖全集刊行会、昭和三十三年、四三〇頁。
- <sup>10</sup> 林逋『林和靖詩集』巻二、十八丁表、同治十二年刊、熊本大学教育学部文庫蔵。
- <sup>11</sup> 原采蘋『采蘋東游日記』、二十三丁裏、「席上贈此」詩。大阪大学附属図書館懷徳堂文庫蔵。（引用は国書データベース <https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100364822/> による。最終アクセス日、2025年3月8日。）
- <sup>12</sup> 同前書二十四丁表、「酬口川氏」詩（口は欠字）。
- <sup>13</sup> 同前書二十四丁裏、「和北條進之」詩。
- <sup>14</sup> 同前書二十四丁表、「悼茶山先生」詩。
- <sup>15</sup> 同前書二十六丁裏、「元旦口号」二首其二。
- <sup>16</sup> 江馬細香『湘夢遺稿』巻一、六丁表、明治四年刊、東京藝術大学附属図書館、脇本文庫蔵。
- <sup>17</sup> 江馬細香『湘夢遺稿』巻二、一丁裏、明治四年刊、東京藝術大学附属図書館、脇本文庫蔵。

- <sup>18</sup> 江馬細香『湘夢遺稿』巻二、十七丁表、明治四年刊、東京藝術大学附属図書館、脇本文庫蔵。
- <sup>19</sup> 富士川英郎『江戸後期の詩人たち』、二〇一二年、平凡社、二七二頁。
- <sup>20</sup> 水上珍亮『日本閨媛吟藻』上巻、十一丁裏、明治十三年刊、山梨大学附属図書館、近代文学文庫蔵。
- <sup>21</sup> 立花玉蘭『中山詩稿』九丁表、明和一年刊、国文学研究資料館（中村真一郎氏旧蔵）。
- <sup>22</sup> 盛宏之『荊州記』巻下、一丁裏、光緒十九年刊、東京藝術大学附属図書館蔵。
- <sup>23</sup> 梁川星巖全集刊行会『註解梁川星巖全集第四巻』、梁川星巖全集刊行会、昭和三十二年、一五四頁。
- <sup>24</sup> 梁川星巖全集刊行会『註解梁川星巖全集第四巻』、梁川星巖全集刊行会、昭和三十二年、三五三頁。

#### 参考文献一覧

- 伊藤信、1925、『梁川星巖翁：附・紅蘭女史』、梁川星巖翁遺徳顕彰会。
- 伊藤信、1969、『細香と紅蘭』、矢橋龍吉。
- 猪口篤志、1978、『女性と漢詩—和漢女流詩史』、笠間書院。
- 揖斐高、1998、『江戸詩歌論』、汲古書院。
- 門玲子、2006、『江戸女流文学の発見 新版：光ある身こそくるしき思ひなれ』、藤原書店。
- 門玲子、2010、『江馬細香：化政期の女流詩人』、藤原書店。
- 小谷喜久江、2017、『女性漢詩人 原采蘋（はらさいひん） 詩と生涯：孝と自我の狭間で』、笠間書院。
- 小森甚作・上地信成、1901、『女流文学史』東洋社。
- 鈴木健一、1998、『江戸詩歌の空間』、森話社。
- 鈴木健一、2004、『江戸詩歌史の構想』、岩波書店。
- 庄野寿人、1992、『閨秀亀井少琴伝』、亀陽文庫 能古博物館。
- 銭心怡、2017、「梁川紅蘭の題画詩について」『中國學研究論集』、広島中国文学会編 (35) 1-10。
- 中村真一郎、1985、『江戸漢詩』、岩波書店。
- 中村幸彦、1986、『近世の漢詩』、汲古書院。
- 林玲子、1993、『日本の近世(15) 女性の近世』、中央公論新社。
- 福島理子、1995、『江戸漢詩選〈3〉女流—江馬細香・原采蘋・梁川紅蘭』、岩波書店。
- 藤川正数、1990、「美濃の女流詩人 江馬細香と梁川紅蘭 -漢詩による交遊関係を中心に-」『岐阜女子大学国文学会会誌』19：51-58。
- 古谷知新、1979、『江戸時代女流文学全集 第四巻』、日本図書センター。

前田淑、2015、『江戸時代女流文芸史 地方を中心に 和歌・俳諧・漢詩編』、笠間書院。  
吉川幸次郎、2006、『宋詩概説』、岩波文庫。

Abstract

**Various Aspects of Plum in Classical Chinese Poetry  
by Women Writers in Edo-Period Japan**

Do Thi Mai

The plum motif has appeared in Japanese poetry since early anthologies such as *Kaifūsō* and *Man'yōshū*, symbolizing purity and perseverance.

During the Edo period, the composition of classical Chinese poetry in Japan increased significantly. From its introduction in the Nara period until the Edo period, such poetry was predominantly written by men. However, during the Edo period, an increasing number of women poets also gained recognition in this literary tradition. With sensitivity to beauty often associated with femininity, female poets frequently depicted plants and flowers in their works.

This paper explores how the plum, with its rich symbolic meanings, was portrayed in classical Chinese poetry by Edo-period women poets. Additionally, it examines how the “plum” motif was employed in both lyrical and descriptive poetry, shaping the expression of feminine sensibilities in this literary form.